

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3577500113		
法人名	社会福祉法人 佐波福祉会		
事業所名	グループホーム かじかの里		
所在地	山口市徳地八坂1330番地		
自己評価作成日	令和5年9月3日	評価結果市町受理日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度ホームページで閲覧してください。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人広島県シルバーサービス振興会		
所在地	広島県広島市南区皆実町一丁目6-29		
訪問調査日	令和5年10月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

○「和と安らぎのある生活を支援します」の理念のもと、職員は「急がない」「せかさない」「一緒にゆっくり」のスローガンを念頭に入居者本位の生活が送れるよう支援している。
 ○食事は三食ともかじかの里で調理しており、調理や盛り付け、配膳を職員と一緒にいき、皆と一緒に囲む食事の雰囲気大切にしている。
 ○入居者が昔を思い出せたり、退屈しないよう季節に合った行事やレクリエーションを行っている。また、苑内を季節に合ったしつらえに整えている。
 ○毎日楽しみが持てるような生活を支援し、職員も含めて笑いの絶えない生活が送れるように努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「急がない・せかさない・一緒にゆっくり」という明確なコンセプトをもとに、一人ひとりの状態や性格、思いに理解を深め丁寧な支援を心掛け、利用者本位のケアを実践している。食事は専門の調理員により三食ともに手作りにて、利用者の意向や季節の食材、かじか農園から収穫した野菜を柔軟に取り入れ提供している。コロナ禍で制限のある中、人との接触到気に気を付けて動物園に行ったり紫陽花見学など意欲的に外出に取り組み、今後新型コロナウイルスの5類への引き下げを機に故郷訪問として自宅に帰宅することなど外出支援にも取り組んでいきたい意向を強く持っている。利用者のできることや好きなことに着目し、畑仕事や調理の手伝いなどそれぞれの特徴に合わせ行っていくことで、利用者の楽しみや生活の中のやりがいとなり笑顔に繋がっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~56で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
57	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:24. 25. 26)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	64	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:10. 11. 20)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
58	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:19. 39)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	65	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2. 21)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
59	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:5)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
60	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38. 39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員は、生き活きと働けている (参考項目:12. 13)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:50)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:31. 32)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
63	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:29)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]【文字サイズは10ポイントのまま変更しないでください】

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ご家族や来苑者の目の届く場所に「和と安らぎのある生活を支援します」の理念を事業所内に掲示し、確認できるようにしている。「急がせない・急かさない・一緒にゆっくり」のスローガンを意識し、共有して、日々のケアの実践に繋げている。職員間で話し合っているも、もう少し頻度を増やす必要がある。	理念を施設内に掲示し確認している。毎年、運営方針を策定し、目標とする取り組みやケアの中で意識的に実践することなどをまとめ、取り組みの方向性を統一している。楽しみの持てる生活を大事にし、自分自身に置き換えて考えることを日々投げかけ利用者本位のケアに繋げている。	理念の確認や共有を図る機会を増やすことで周知や理解を深めると共に、理念に沿った取り組みとなっているか振り返る場を持つことで、より一層の理念・スローガンに沿った支援となることを期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	コロナウイルス感染症拡大防止のため、利用者の体調も考慮し地域の方々との交流は中止している状態が続いている。	コロナ禍で地域との交流は自粛を継続している。以前は法人夏祭りに地域の方をはじめ小学校や保育所、ボランティアの参加があり、太鼓の披露などを行っていた。さつきの会による作品作りや歌の交流があり楽しみとして定着し、散髪も地域の理髪店が来られるなど様々に繋げている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	3カ月ごとに発行している苑広報誌「とくち苑だより」や、ホームページでのブログ、また年2回発行している「かじかの宿」にて、ご家族に活動状況を発信している。	/	/
4	(3)	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	各々で自己評価を行い、取り組み状況を振り返り、見直ししている。他の職員と話し合いをすることで今後の業務に対する取り組みへの改善に繋げている。	毎年、職員各自で自己評価に取り組み、振り返りや見直しを行っている。日々の取り組みを見つめ直す機会となり、評価結果から達成目標を定め、評価内容を職員間で話し合う機会を設けることで、更なる気付きの獲得や職員同士の共有となり支援の質の向上や改善に繋げている。	
5	(4)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	昨今の状況下において資料送付という形で行っていたが、今年度より、従来のような対面での会議を行い、家族代表・地域代表・地域包括支援センター・駐在所職員等に現状を報告し、ご意見・助言を頂く方向で進めている。	コロナ禍で書面での開催が続いていたが、今年度より対面での開催としている。活発な意見交換があり、家族から音楽が好きな方もいる意見に、意識的に音楽を流し、利用者も自然と口ずさむようになり、それが波及し広がったことでリビング内の雰囲気も変化した例がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○市町との連携 市町担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	徳地総合支所総合サービス課や地域包括支援センター徳地分室と連携をとっているが、勤務状況により地域ケア会議等に参加ができていない。今後は積極的に進めたい。	介護や運営上の理解や解釈など随時市の担当課に確認している。運営推進会議など地域包括支援センターと意見交換し、日常的な関わりを形成している。市や地域包括支援センターが主催する研修も確認し、直近では消防署からの救命救急対応やAED使用について案内があり参加をした。	
7	(6)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の内容とその弊害を認識し身体拘束をしないケアの実践に取り組んでいる。玄関にセンサーを設置しているも施錠せず、帰宅願望がある際は、付き添い苑内散歩を行ったり、生活レクの提供を行い落ち着けるような対応をしている。	3カ月毎に法人全体で身体拘束適正化検討委員会を実施し、身体拘束防止に向けた話し合いや研修を実施し、内容の周知や身体拘束による弊害について認識を深めている。職員全員が議事録を確認し周知を徹底している。制限をしないことを意識し、ケアに柔軟性を持ち対応に努めている。	
8		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部・外部研修で学び、職員の意識を高めている。言葉での虐待も含め、見過ごさないよう注意し職員間で声を掛け合い虐待防止に努めている。		
9		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ご家族の希望があった場合、事務局・運営者・行政・対応者が連携を取り、成年後見制度を利用している。また、研修で学んだ権利擁護に関する情報を職員間でも周知している。		
10		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結・解約の際は、管理者が重要事項説明書・サービス利用約款を基に説明し、家族からの相談を受けている。改定は事務局より説明している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等からの相談、苦情の受付体制や処理手続きを定め周知するとともに、意見や要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居時に苦情受付や第三者苦情受付窓口を管理者が説明している。本人には、日々の関わりの中で思いを聞き、家族には面会や電話の際に意見、要望を聞いて運営に反映させている。	家族には面会や連絡時に意見や要望を確認している。夏時期の着重ねに注意して欲しいと家族の希望に季節に合う服装をより意識し支援するようになった例がある。利用者には日々の関りから把握を行っている。帰宅への思いも多く聞かれるので今後、故郷訪問を行うことを計画している。	
12	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	情報共有会議や職員会議での意見や提案について検討を行っている。日々の業務の中でも意見や提案を聞く機会を設け、思いを発することのできる環境をつくっている。	夜勤のローテーション勤務の相談に負担を最小限に留められるよう、意向にできる限り寄り添いシフトを作成することや、自由な発想や提案を大事にし、利用者への支援においてタブレットをテレビに接続して歌や体操をできるようにしたり、化粧品、ラジカセの購入など様々に実現している。	
13		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者や職員の意見・要望を聞く機会を設け、向上心を持って働けるよう環境や条件の整備に努めている。また、職員の特性を考慮しながら実施している。		
14	(9)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナウイルス感染防止のため、資格取得・更新以外の研修は積極的に受けていないため、内部研修を行っているが、今後は状況により以前のように実施していきたいと考えている。	法人内の内部研修も充実しており、外部研修を含め希望に沿った研修の参加を選択できるようにしている。受講後の研修内容については伝達研修を行い、職員全員が周知できるように行い全体のレベルアップに繋げている。管理者はケアの中で気付きなどあれば即時指導や助言を行っている。	
15		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	昨今の状況下のため一部の職員以外実施出来ていないが、今後の状況下において取り組んでいきたいと考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
16		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時のご家族からの聞き取りや、ケアマネからの情報提供書をふまえ、日々の本人との関りの中で思いや願いをくみ取り、職員間で情報を共有して、信頼関係を築くように努めている。		
17		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時、ご家族との話し合いの中で思いや願いを聞いている。職員全員に周知し、信頼関係を築けるよう努めている。入居後、しばらくはご家族に状況を伝えることで安心できるようにしている。面会時や電話の際に状況を報告している。		
18		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の状態やご家族の状況を把握することで必要な支援を見極めている。		
19		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者を主体とした生活の流れの中で、職員は暮らしを支える理解者の立場で共に暮らす者同志の関係を築いている。		
20		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	近況報告をこまめに行い、ご家族の理解を得ることで共に本人を支えていく良好な関係を築けるよう、連携を取っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昨今の状況下のため、故郷訪問や地域行事への参加、また地元スーパー利用は休止している。ご家族との面会は実施しており、徳地地域での苑外活動実施にて、少しでも身近に感じてもらえるようにしている。	利用開始時に以前に担当していた介護支援専門員からの情報や家族から生活習慣や背景、馴染みのことなど聞き取りを行い把握している。本人に何がしたいかを聞きながら、自宅へ帰りたいたい思いに故郷訪問を行うなど、本人の思いと馴染みの関係がうまく合わせられるように支援している。	
22		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事やお茶の時間を共にし、一緒にTVを観たりレクリエーションができるようなスペースを設ける事で、良好な関係が築け、会話やレクリエーション等が楽しめるようにしている。		
23		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約が終了し、特養や病院に移ってもケアマネを通して状況を把握するようにしている。家族からの連絡時も状況把握できるように対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
24	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時の生活史を参考にし、家族や担当ケアマネからの聞き取りから、在宅での生活を知るようにしている。日々の生活の中での関わりで、思いや要望を聞き添えるよう努めている。	生活歴などその方の人物像から導き出される一人ひとりに思いがあることの理解に努め向き合っている。調理の手伝いに栗ご飯の栗の皮を剥いてもらうなど、できることや役割を注視し活躍を支援している。お寿司が食べたい希望にちらし寿司を急遽提供するなど、実現に取り組んでいる。	
25		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前情報や生活の中での情報により、本人に必要なケアを職員間、家族から聞き取り抽出を行い支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の様子をケース記録に残し、全職員で状況を把握し共有し支援している。		
27	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の生活状況や健康状態を記録に残し、申し送りにより全職員にて共通認識を図っている。また、担当者会議を行い、本人・家族の意向を基に職員間で話し、介護計画書を作成している。面会時等にてサービス内容をケアマネより説明し理解を得ている。	生活状況の記録、職員からの情報をもとに、計画作成者と各担当職員とで検討し適宜管理者と確認を行っている。医療面でも必要に応じて医師や看護師に確認しながら作成している。希望や現状を踏まえ得意なことやできることを意識して取り入れ、生活が活性化できるように検討している。	
28		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のサービス計画を一覧にし掲示することにより、全職員がいつでも確認できるようにしている。体調や計画に沿った支援を記録し、申し送りにて、全職員が把握し今後の対応やケアプランの反映に活かしている。		
29		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々の現状に即した支援に努めており、ADLや認知面での変化がある時には職員間で話し合い、本人が過ごしやすくなるような対応に努めている。		
30		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在はコロナウイルス感染防止のためボランティアの来苑は控えており、地域資源との関りは少ない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31	(13)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には家族の付き添いで受診し、苑での様子を主治医に伝えてもらい、診察結果・対応方法を報告してもらうことで医療機関と家族・事業所との連携を図っている。	地域の診療所があり、そこをかかりつけ医にしている利用者も多い。事業所協力医とも自由に選択ができるようにしているが、これまでの馴染みのかかりつけ医に継続し医療を受けることもできる。専門科にも家族の協力を得ながら受診を行う事ができ、安心できる医療体制を構築している。	
32		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が常駐していないため、同一敷地内施設の看護師と連携を取り、相談や看護が受けられるような態勢を整えている。緊急事案の際は、ご家族と連携し適切な受診が受けられるようにしている。		
33		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、基本1日以内に情報提供書を提出し、病院と情報共有している。地域連携室とも情報共有し、状況の把握に努めている。		
34	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に重度化した場合の対応を説明し、家族の意向を聞いたうえで、できる限りの対応をしている。同敷地内施設とも連携し支援を行っている。	利用開始時に重度化した場合の対応を説明し意向を確認している。状態低下にて重度化した場合、家族にできる限り対応していくことを伝え、思いを聞きながら看取りに取り組んでいる。医療的な支援が必要な場合など事業所での対応が困難な場合は必要に応じて特別養護老人ホームなどに繋げている。	
35	(15)	○事故防止の取り組みや事故発生時の備え 転倒、誤薬、行方不明等を防ぐため、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組むとともに、急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている。	緊急時マニュアルを作成し、全職員がいつでも確認できるよう掲示している。また、日頃より事故防止のために内部研修を行い、危機管理に努めている。	緊急時マニュアルなど各種マニュアルを整備しいつでも確認できるよう整えている。職員会議で利用者への気づきや変化を都度話し合うことや、事故報告、事故防止研修などにてリスクマネジメントについて理解を深め、全員が共有することを徹底し全員が意識を持ち取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力を得て、昼夜を想定した年2回の避難訓練を行っており、初期消火・通報・避難を実施している。水害を想定した避難経路の確認も合わせて行っている。	年2回、消防署の協力のもと昼夜を想定し避難訓練を行っている。ハザードマップ上、水害や土砂災害が想定されるエリアであり、訓練では水害を想定し敷地内別館の2階に避難を行い、危険の認識を全員が持ち共有するように意識している。備蓄は法人内で一括にまとめ管理している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
37	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人のプライバシーや誇りを損ねないように配慮し、対応や言葉がけを行っている。	毎年、年間研修計画を予定し取り組んでいる。プライバシーや個人の尊重、一人ひとりのペースを重視し、居室の扉は必ず声をかけて行うことなど基本を忠実に実施し、プライバシーへの配慮や個人を敬える支援を行っている。利用者へは自己決定がしやすい声掛けや配慮を意識している。	
38		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中で遠慮なく思いを発信できる雰囲気をつくっている。また、自己決定できるような声かけに配慮している。		
39		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを尊重し、職員側の都合を優先せず、本人の意見を優先し希望にそって支援している。		
40		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時の着替えは本人に準備してもらっている。また、散髪は地域の理髪店から来てもらっている。季節時に衣替えも職員と一緒にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者の好き嫌いやアレルギーを考慮し、食べたい物を聞いて献立を立てており、かじかの里内で調理している。調理の下準備や盛り付け、配膳等、個々のレベルに合わせて職員と共に行っている。	調理専門員が3名在籍し、三食とも手作りで出来立ての食事を提供している。利用者の好みや季節の食材を臨機応変に取り入れ、家庭的な料理を提供しており、利用者の毎日の楽しみとなっている。毎月昼食会やおやつ作り、夏祭りは浴衣を着てお食事パーティーなど楽しめる企画がある。	
42		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一週間毎に献立表を作成しバランスの摂れたメニューが提供できるよう努めている。苦手なメニューがある時は代替し、摂取量を確認して次に活かしている。同一敷地内施設の管理栄養士からも、食事内容について助言をいただいている。		
43		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に必要時は手順を伝え自力での口腔ケアを勧めている。義歯及び口腔セットは定期的に消毒洗浄し、清潔保持に努めている。		
44	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	必要な利用者には定期的にトイレに誘導し、手順も伝えている。また、紙パンツ・パットの使用量軽減に努めている。自身で行える方は、本人に任せ意思を尊重しつつ排泄の自立に向けた支援をしている。	排泄チェック表にて利用者一人ひとりの間隔や状況を把握し、定期的な声掛けや、そわそわしたりなど、利用者が表出する個々のサインを見落とさず誘導や介助を行い、トイレでの排泄を行い、利用者の状態によっては失禁予防体操などを実施するなど、自立に向けた支援を行っている。	
45		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	タブレットと排便チェック表にて排便状態を把握している。手作りヨーグルトの摂取や個人での果実入りジュースを摂取してもらいながら、必要な方には主治医と連携して下剤等を処方してもらい対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	本人の意向や体調に合った入浴支援をおこないながら、ゆっくりと入浴ができるよう支援している。入浴拒否のある方は本人のタイミングや声かけ方法を職員間で共有している。	一人当たり週2回、午後からゆったり入れるよう支援している。個人の馴染みや習慣を理解し、体調に配慮し、長湯など時間や湯の温度など個人の好きに合わせ実施している。入りたくない時は時間やタイミングを変更し柔軟に対応している。1対1で話もゆっくり聞ける機会となっている。	
47		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣を尊重しTVを観たり、読書をする等、くつろげるスペースを作っている。一人で過ごす時間と空間を設けることで在宅時からの習慣を継続できるようにしている。		
48		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全ての入居者の処方説明書を、いつでも確認できるようにしている。配薬シートを利用し確実に服薬介助を実施し、飲み忘れや誤薬を防止している。排便間隔・頻尿等の状況に合わせて主治医と相談している。		
49	(21)	○活躍できる場面づくり、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や趣味・嗜好品・個別に得意なことを把握して、かじか農園の実施等、個々の力が活かせるような支援を実施している。	一人ひとりの生活歴や本人や家族からの話から得意なことや趣味趣向の把握に努めている。調理を一緒に行うなど個々に介護計画にも取り入れ、日々取り組めるよう支援している。かじか農園にて茄子を栽培し、茄子のからし漬けを作ったり、畑の苗植えや収穫が楽しみとなっている。	
50	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナウイルス感染防止のため希望による外出はできていないが、状況を鑑み、地域での苑外活動の実施を増やしている。今後の動向をみながら故郷訪問を行ってきたい。	苑敷地内の散歩を日常的に行っている。コロナ禍にて外出を控えることを継続していたが、紫陽花見学、動物園へ弁当を買って出かけるなど少しずつ苑外への外出を増やしている。以前ではスーパーへの買い物、花見、初詣、故郷訪問にて自宅へ帰宅するなど戸外への外出を支援していた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭の預かりはしておらず、必要時には、家族の了解を得て職員で購入している。状況に応じて家族に依頼することもある。		
52		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っている方は、自由に電話できるようにしている。家族への連絡を希望される方には、職員が代わりに電話で要件を伝えている。		
53	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔を心掛け、遮光や温度に配慮し誰もが気持ちよく使用できるようにしている。入居者が作成した季節の掲示物や花等を置き、くつろげる環境を作っている。また、横になれ畳・ソファ等配置している。	建物は木の造りにて温かみがあり、陽当たりも良好で心地よく過ごしやすい環境である。テラスにて天気の良い日は外気に触れおやつを食べたり、苑の畑の風景を眺めながら和やかに過ごせるようにしている。対面式キッチンから調理の音や匂いが感じられ生活感のある空間となっている。	
54		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやベンチを置くなどし、共有空間の中でも一人で過ごしたり、仲の良い入居者同士で会話したりと思い思いの時間が過ごせるよう工夫している。		
55	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、使い慣れた家具やTV・座椅子・コタツ・時計等、なじみの物を持ち込み、家族の写真等を飾って在宅時の雰囲気が残せるような環境の下で生活している。認知能力の低下に伴い、状況に合わせて調整している。	好みのものや自宅で慣れ親しんだ家具や調度品など自由に持参ができ、家族の写真を飾ったりと、それぞれが馴染みに囲まれ落ち着いて過ごせる環境づくりがなされている。家での暮らしや配置を確認し居室内を整えている。畳の利用を選択することも可能としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
56		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	食堂・浴室・トイレ等、迷わず認識できるように名称の表示をしつつ、本人に合った表札にしている。元々本人の好きな事ややってきたことを把握した上で、出来ないことが増えてきても、出来る面を重視し維持できるような手順の声かけにて実施している。		

(様式2)

2 目標達成計画

事業所名

グループホームかじかの里

作成日

令和5年11月16日

【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点, 課題	目標	目標達成に向けた具体的な取組み内容	目標達成に要する期間
1	1	理念・スローガンを職員間で確認・共有する機会が少ない。	事業所理念・スローガンを全職員で共有理解して支援に活かす。	毎月の職員会議で、理念・スローガンに沿って取り組みを行っているか振り返りを行い、より良い支援となることを目指す。	6ヶ月
2	35	緊急時の対応について、マニュアルは作成しているが、事故やヒヤリハットに対する危機意識が低い。	全職員が状況に応じて臨機応変に対応できるよう、実践力を身につける。	○事故の状況に応じて、適切な判断や対応ができるよう、内部研修を通してイメージしておく。 ○入居者の生活の場で危機感を持って支援を行い、危険予知能力を養う。 ○ヒヤリハットを意識的に提出し、事故防止に繋げる。	6ヶ月
3					
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。